

風水研究家 / 一級建築士

今井雅晴

風水からのメッセージ

人生・ビジネス・家づくり 想えば実現する



風水からのメッセージ

人生・ビジネス・家づくり 想えば実現する

風水研究家 / 一級建築士 —— 今井雅晴

推薦のことば (株)東洋書院 斎藤勝己

今井雅晴氏を知ったのは、氏のHP「占術の世界」体感記を読んだのがきっかけでした。中でも私が惹かれたのは今井氏が建築設計の仕事をしながら出会った占術の世界に引き込まれた話でした。

話によると今井氏は幼少の頃から趣味の手品に興味を持ち好奇心旺盛な少年でした。その不思議探究がその後出会った占術探究につながったようです。

彼の占術に対する豊富な体験と占術文献収集の話には目を見張るものがありました。執念を感じました。惜しげもなく多くの体験例を公開したことが、わが国の多くの占術関係者に影響を与えたようです。

私は出版関係の仕事をしていますが、当社の出版物にも今井氏が発表された占術文献の復刻に関するヒントがありました。

以前彼の住む高崎にお伺いし、今井氏が学ばれた占術の話をお聞きしました。その後、今井氏の占術の師であった高島正龍選集の発刊編纂をお願いしました。また当社で復刊している八木喜三郎選集の編集にも協力いただき、感謝しています。

今回その今井氏が今までに発表されたレポートをまとめられ、風水理論を取り入れた「人生・ビジネス・家づくり」に関する内容の本を発刊されるといふ話を聞き、「推薦のことば」を書かせていただきました。

ご縁ある読者の皆さんの「快適に生きる」指針書になれば嬉しいです。後輩のためにも今後の今井先生の益々のご活躍を期待しています。

推薦のことば 青年気学研究会 佐野暢秋

今井雅晴氏は私と同様建築設計事務所を運営しています。

氏とは同じ建築設計の仕事また易占研究の仲間としてこれまでにたびたびお会いし、そのたびに楽しく飲んでいきます。

今回「人生・ビジネス・家づくり」の集大成の話を聞き、建築の設計に携わる者としてその公開を非常に楽しみにしています。

人は天地の理気を受けてその命を安んじも危くもするのです。身命の基本的な保全の空間である「住居」やそれが存在する場を持つ多面的な力（＝自然理のエネルギー）が人に影響を及ぼします。設計する人も実際に建物を造る人もこの「力」の正しい理解とそれを活かして用いる「法」を知ることが必要です。

ネットの世界にはこの分野についての論述が多くありますが、誉められるサイトやHPに出会ったことがあまりありません。

今までの今井氏の活動ぶりや表現ぶりからすれば企画しているサイトは必ず懇切緻密丁寧な表現でほかが追従できない豊富な内容のものとなるでしょう。乱立し玉石混交のネットの中で「真玉」のHPになるであろうことは間違いないでしょう。数年前から公開されている氏の別サイトを見れば抜群のアイデアと豊かな内容、詳細緻密な記述表現からこのことが確信できます。

今井氏は建築設計のみならず多方面にわたる驚愕の才能の持主です。

私の知る範囲では手品、マジック、絵画や漫画描画や、易学、風水、気学を始めとする東洋占術の数々を習得され各分野の「真の達人」で、趣味の段階をはるかに超え、どれをとっても知識技量とも卓越したエキスパートなプロといえます。

また、ハードな設計業務だけでなく執筆、講義、講演、ラジオ放送等で活躍されており、浜名湖花博での「風水の庭」の総合監修は建築界で高い評価を得ています。

今井氏のこの知の習得欲と技の研磨努力、実際行動のエネルギーはどこから出てくるのだらうと考えた末に氏を一言で表現する言葉を見出し、何年か前に本人にメールしたことがあります。その言葉は「今井さんはバケモノだ！」でした。

最近はその「化け物」に益々磨きがかかってきたようで新たなプロジェクトを発足させるといふ話には「やっぱりバケモノだった」と洩らしたものです。

頂上に達しても止まっていられず、常に知識の収集と勉強、技量の向上を目指し飛翔しようとする姿勢から、この「化け物」は本物の「龍」に変化してきていると思われます。

今井氏の頭脳にある各分野の卓越した知識の「各単独系」が微分されたり、積分されたり、コラボされたり掛け合わされたりして、自然理の新たな「解明系」が氏の卓越した感性から創造されることを期待し、数十年にわたる知技の集積とそれに磨きがかかった今、「入塵垂手」の境地に入られたことを心から祝福し、学ばせていただくつもりです。

はしがき

人生とは何か？ あなたは考えたことがありますか？ 「一度限りの人生」、このフレーズから、あなたは何を感じますか？ この問いに対し、私が建築設計をしている過程で出逢った「風水」というキーワードから私が学んだノウハウと、ご縁あるあなたに「人生を最高に生きる極意」を風水メッセージとして提案してみます。

第1章は「私と人生」についてです。人に歴史あり！ といわれていますが、人間生まれてから死ぬまで一つの線でリンクされています。ということはこの線をプラスのラインにするかマイナスのラインにするかは自分自身が創っていることになります。プラス思考、マイナス思考が然りです。あなたにとって毎日起きている現象には意味があるということです。人は宿命と運命によってある程度自分の一生が約束されているという占術理論があります。生まれ育った環境や人との出会いによっても人生が変わります。この章では私が出逢った体感記を公開いたします。実はこの体感記が今も線となつてつながっています。あなたが体感したことがあなたの人生なのです。ということは？ 毎日を有意義に過ごすことです。キーワードは今です。

第2章は「私と風水」についてです。その原点は私が建築設計の仕事を通して出逢った風水にあります。この章では風水理論を人生・ビジネス・家づくりに応用、活用、展開した実践記を公開します。あなたにとって幸福な人生とは何か？ 「風水の原理」宇宙の原

理」がわかると幸せになれます。あなたもこの章で私が発信した風水メッセージからそのヒントを是非、受信して実践してください。

第3章は「私とビジネス」（情報起業）についてです。建築設計の仕事をしていく過程で情報起業の世界に巡り合いました。この世界は私にとって未知の分野でしたが、目の前で起きることに意味があります。出逢いも縁ですのでその世界を探究してみました。建築設計の仕事とは全然違った世界でしたが私に刺激を与えてくれました。発想が変わりました。ここでは素人の私にもできましたので、あなたにも是非、味わっていただきたいと思い、その実践記を公開しました。あなたも挑戦してください。ものの見方が変わり人生が変わります。

第4章は「私と家づくり」についてです。人生を楽しく過ごし仕事を成功させる秘訣は家づくりにあります。この章は私の専門でもありません。まずは私の設計した3物件の自邸、事務所、事務所併用住宅の物語と検証です。建物は生きています。進化するリフォームについても提案しました。人生が楽しくなります。風水住宅実践例（企画から竣工まで）を公開しました。あなたにとって粋な家づくりとは何か？ 家づくりによりあなたの人生・ビジネスを楽しむ方法を提案します。

第5章は「風水八運の生き方」についてです。テーマは「想えば実現する」です。そんな世界があれば人生は楽しくなります。この章では私が今までの実践体感記からその世界を検証・提案することにしました。その世界こそ天からの贈り物といって良いで

しよう。あなたもこの章からその宝物を入手してください。人生がもつと楽しくなります。

ということ、まずはこの著書の全体像を描いてみました。今回の文庫本を発刊するにあたり、私が今までに風水講演会やラジオ番組で話したこと、雑誌等に掲載した風水記事を中心にまとめてみました。これらの中から「人生を楽しく生きる秘訣」を多数提案してきます。

再録しますが、実は毎日あなたの目の前に起きる現象は意味があり、すべて未来にリンクされているという事実を実感してください。あなたがこの原理を確信することで、あなたの生き方は飛躍的に前進いたします。

そして人生の究極は「想えば実現する」という現象です。この原理がわかると人生が楽しくなります。あなたもその世界を堪能してください。私の熱き想いでもあります。

今回の文庫本の発行にあたり、まず私の頭に浮かんだことは、私が今までに書きとめてきた文章をテーマごとに時系列に整理することでした。

私が今までの体験から「人生は宇宙とつながっており、リンクされている」ことをご縁あるあなたに伝えたかったからです。

そこに「想えば実現する」という世界が存在するのです。時には時間がかかることがあります、あなた自身の準備ができていないと実現しないこともわかりました。

この書からあなたにとっても最高の人生を生きる極意を見つけてください。

今井雅晴

風水からのメッセージ

人生・ビジネス・家づくり

想えば実現する

目次

推薦のことば

(株) 東洋書院 斎藤勝己

青年気学研究会 佐野暢秋

はしがき

第1章 木の巻 私と人生

生い立ち

風水体感記 (天の巻)

風水体感記 (地の巻)

風水体感記 (人の巻)

風水体感記 (乾の巻)

風水体感記 (坤の巻)

第2章 火の巻 私と風水

大掃除と風水 (ラジオ高崎)

風水開運人づくり21 (風水を語る)

風水インテリア実践講座 (全4回)

浜名湖花博「風水の庭」

群馬の風水

風水都市を巡る旅

第3章 土の巻 私とビジネス（情報起業）

情報起業の世界入門

あなたの適職

開運成功プログラム

神田昌典.com「今月の実践大賞」

しまむらとヤオコー

第4章 金の巻 私と家づくり

進化する住宅（設計者の本音を語る）

最初の自邸（ステレオBOXハウス）

最初の事務所（混構造）

事務所兼自邸（住宅展示場風）

祐気空間の創造

197

223

228

251

252

281

288

297

307

313

314

315

322

325

329

3つの建物の関係を分析する	334
進化する住宅リフォーム	338
風水住宅実践例2012（企画から竣工まで）	344
風水住宅実践例2013（企画から竣工まで）	347
風水八宅法（風水天盤、人盤）	350
第5章 水の巻 風水八運の生き方	359
風水七運、風水八運を語る	360
風水八運後半を生きる	363
人生アラカルト	382
【特別付録】 アナログ九星占法	407
「あとがき」（天の声）時を超えて	409
参考文献	417

第1章

木の巻

私と人生

人生を語る上で大切なことは、「まず自分自身を知る」ということです。人間は意外にも自分自身についてわかっていません。参考までに私の今までの人生を振り返って自身を分析してみます。一生の中では何回かのターニングポイントがあります。私の場合45歳の時でした。ということ、まずは45歳以前に体感したことを生い立ちとしてまとめます。

生い立ち

私は1947年2月生まれです。長男として生まれました。戦後生まれの団塊世代です。弟が一人います。父はサラリーマンで母は歯科医師でした。父と母のなれそめは歯科医師であった母の診療院に父が歯の治療に通ったことから始まったようです。母は群馬県人ですが、歯学生時代の同僚が富山県人ということで卒業後富山県に入り、そこで父と出逢ったことになりました。

人生は縁で構成されており、まず出逢いから始まります。距離は関係ありません。

私は小学1年生までは富山県婦負郡細入村楡原の片田舎で暮らしていました。今でも当

時の大雪の記憶が脳裏に残っています。雪の解ける5月の連休頃がまさに春の訪れでした。

私が小学2年生の春、母の郷里である群馬県高崎市に帰郷しました。母の父親も歯科医師で帰郷後、母は父親が営む歯科医院で父の仕事のアシストしながら働いていました。

そんな環境の中で私は育ちました。忙しかったせいか子供の私たちにはあらゆる面で無関心でした。そのため私にとっては毎日が日曜日であり自由奔放な生き方を楽しんでいました。金銭的にも比較的自由であったため、幼少の頃から「欲しいものは必ず手に入れる」という習慣が身についたようです。

当時、カバヤとかグリコのおまけの景品集めに熱中していました。また、歯科診療が終わったあとで祖父の好きだったうなぎやトウモロコシを孫の私に食べさせてくれたせいも、今でも私の好物になっています。

ということとで私の生き方の原点は歯科医師であった祖父の生き様の影響が強いようです。夏休みには母の実家に入りびたりで、私は毎日手品の本をむさばり読んでいました。当時、手品用品は天地奇術研究所から通信販売で購入していました。

小学生の頃の性格はおとなしいほうで、どちらかといえば人前で話ができない消極的な人間でした。小学6年の時、卒業式の演芸会で友人と共に手品を学校の講堂で披露したのも想い出の一コマです。

中学に入り、1年の時は勉強に夢中になっていたせいか前期の成績はクラスで2番でした。ところが1年の後期から友達と貸本屋に通うようになり、貸本を借りてくる生活が始

まりました。当時この種の漫画は劇画といわれていました。ここから生活が狂ってきました。最初に投稿したカット（挿絵）が単行本に掲載されたのです。快感でした。

その日を境に毎日投稿生活が始まりました。学校から帰るとカバンはそっちのけで、ケント紙と墨汁で劇画を描き始めたのです。

この期間がなんと3年の春まで続きました。約2年間で33点のカットが単行本や地元新聞紙上に掲載されました。さすが3年の春となると高校受験のため中止しました。翌年高校に入学しましたが、入学後は絵を描く行為はなくなりました。自分の才能に絵心はないことに気づいたのです。

高校入学後はギターに興味を持ち、友人とハワイアンクラブを立ち上げ、高校生活の3年間はギター生活に明け暮れていました。

3年になりますと大学受験の話が出てきます。生まれて初めて自分の進路について考えるようになりました。建築学に魅力を感じました。受験勉強の中で参考書のカタログを取り寄せている過程で、「奇術研究」という奇術専門誌を発行している出版社を知りました。その時、幼少の頃に楽しんだ奇術に関する想い出が蘇ってきました。大学に入学し奇術研究ができることを楽しみに受験勉強に励みました。

某大学の建築学科に入学しました。翌月には学内に奇術愛好会を設立させました。「奇術研究」という奇術専門誌のバックナンバーを取り寄せ、その専門誌を読む日々が続きました。2年間寮生活をしていたので入手した教本からマスターしたマジックを寮生に披露

する機会に恵まれました。結果、1年の後半には自分でも奇術を創作できるようになりました。

その後自分が愛読した「奇術研究」誌上に私の創作カード奇術のシリーズが掲載されました。今の奇術界ではオリジナルという世界は当たり前前の時代ですが、当時では創作奇術という分野の先駆けでもありました。

建築を学びながら？ 覚えたマジック生活4年間は一生の宝となりました。武藤章研究室で卒論と計画を学びました。大学生時代「創作奇術を考える」という貴重な体験は、その後の私の生き方にも影響を及ぼしています。

入学から4年後、無事建築学科・奇術コース？ を卒業し、地元の建築設計事務所就職しました。当時はバブルの時代でしたので、私は多くの各種建築の設計監理を担当し、貴重な体験をしました。就職して3年目に同じ職場で事務を担当している女性と結婚しました。私が26歳の時でした。奇術が縁でした。

その時、初めて住宅を設計しました。長男ということで二世帯住宅でした。また仕事以外では勤務中の昼休み時間は学生時代に考えた創作奇術を再整理し、奇術専門誌にコイン&紙幣奇術を発表していました。唯一の楽しみの時でもありました。

在職中に「一級建築士」の資格を取得しました。その後、店舗建築にも興味がありましたので、「商業施設士」という資格も取得しました。その後、10年間勤めた事務所を退職し、私の建築設計事務所を設立しました。

特別に目標があったわけではありませんが10年の節目ということで33歳の時でした。

わが建築設計事務所といっても、専用住宅を事務所用として外観を模様替えしました。この改修工事は施工例として建材メーカーのPR用はがきに掲載されました。設立時は私と妻の二人三脚で悪戦苦闘の1年間が過ぎました。

その頃、以前勤めた設計事務所所長の計らいで事務所設立のお祝いに「歯科医院併用住宅」の設計を下請けとして依頼されました。実はこの仕事を引き金となり、その後のわが事務所の進路が決まっていきました。偶然といつかこの頃から全国的に歯科医院建築設立のブームになったのです。

となりますと、私の叔父も歯科医師という立場から私に歯科医院設計の仕事を応援してくれました。叔父は東大法学部卒の歯科医師ということで社会的にも信頼がありました。

わが建築設計事務所を設立後の10年間で45件の歯科医院や歯科医院併用住宅を設計監理することができました。1年で12物件を担当した年もありました。ということは1カ月に1件の割合で歯科医院の建物を設計監理してことになります。当然忙しかったです。

寝るのも惜しんで働きました。おかげで事務所設立2年後に自宅の前にミニながら新事務所を新築することができました。自宅前ということで外観も同じデザインでまとめました。この間に一つの問題に遭遇しました。

某歯科医院併用住宅を設計終了し、地鎮祭の前夜、施主のお母さんから電話がありました。このプランで建築すると災いがあるとのこと。予定されていた翌日の地鎮祭を急

遽中止し、設計の一部を変更し、1カ月後工事が始まりました。悪夢でした。建築業界に入って初めて家相という世界に出逢いました。

半面、家相というあやしげな世界に魅力を感じました。今までに興味として不思議な奇術の世界を研究していたのが原因かもしれません。さらに自分の創作奇術掲載の原稿も終焉を迎えた頃でしたので、この想いは加速されました。実はこの悪夢の事件？ から私の人生が変わりました。

「建築と家相」、私が探究するには面白い組み合わせでした。設計の終わった許す限りの時間をその探究に没頭しました。

その後、事務所設立5年目に個人事務所から法人化しました。設計の仕事として店舗や住宅の設計が入ってきました。在勤中に取得した「商業施設士」の資格が呼び水となったのかもしれない。

そして事務所設立9年目に前の事務所から道路を挟んで徒歩15秒の南西の場所に今の新事務所を新築することができました。私が41歳の時でした。この年、昭和の時代が終わりました。

平成に入り、事務所内の仕事も新しい物件に様変わりしてきました。半面、自分自身ここ十数年間に設計の仕事一筋に突っ走ってきて、多くの各種建築の設計をし、多くのすばらしい人との出逢いもあり、新事務所を建てられた達成感と満足感の後で、「このまま今までどおり仕事をあわただしく続けていくと、なんとなく一生が終わってしまう」という

1992年、実はこの年、52カ月続いた大型景気も「バブル崩壊」となり暗転、世の中が「複合不況」となり、時代が変わろうとしていました。

時代は八白土星の年、改革変革の年です。

20世紀から21世紀に移行する序曲の時代でもありました。そして、偶然にも私にとっても「エポックメイキング」というか新時代が始まりました。

当時、船井総合研究所会長であった船井幸雄著の『人間の研究』3部作の本に出逢いました。まず本の内容が刺激的でした。

世の中を変える多くの人物が紹介されていました。自然哲理の中で世の中が不安になると必ずそれを補うものが誕生するという法則があります。まさにそんな時代に突入したのです。世の中ノストルダムスの大予言のシリーズ本もベストセラーになっていました。

この頃、私自身も今までの自分自身の生き方を改革しようといくつかの習い事に挑戦しました。私にとっても改革変革の年でした。

まずは「話し方教室」でした。仕事の打ち合わせは個人対象ですが、大勢の前で話す機会はありません。不得手なのが受講の目的でした。

また健康増進を兼ねて「水泳教室」にも通いました。はずかしい話ですが当時は泳げませんでした。中小企業同友会といった異業種交流会にも入会しました。私にとって毎日が

自己改革の時でした。刺激的な毎日が続きました。

また船井先生の本に紹介されていた医師の矢山利彦先生率いる気功東京教室に通い始めて3年ほど経っていました。体験することすべてが新鮮でした。特に矢山先生の気功教室はなぜか私の求める不思議な世界と共通する魅力がありました。と同時に見えない世界を知る貴重な体験を学ぶ教室でもありました。

そして同年10月、私の生き方までも変えた「風水」との出逢いの年でもありました。人間変わろうとすると情報は向こうからやってくるという体験を味わいました。あとは自分が何を選択し学ぶかです。時代も変革を求めているのです。

そして翌年の1993年10月、私の住む群馬県高崎市在住の同志から『人間の研究』に紹介された先生方を高崎に招いて講演会を開催しようという動きが始まりました。

この運動は自然発生し、会の名称は私の提案した「近未来研究会」に決定しました。また、近未来研究会では月2回の気功実習の分科会が有志によって開催されました。内容は矢山気功法です。10月に設立して数カ月で会員数は50名を突破しました。これは驚きでした。翌年の1994年には会員も100名を突破し、1月から「テレパス21」という会報が発行されることになりました。会員が自分の意見を自由にこの誌上に発表することができるといったのです。

私も今までに体験してきたことを自由に発表することにしました。年の功といいますが、若い人の刺激になればと想い、仕事の合間を見て原稿を整理して発表を続けました。

近未来研究会が発足して5年間で講師として招いた先生方は25人でした。さらに分科会も加速していました。そんなパワフルな時代でした。時代が変わろうとしていました。

以下、まずは風水入門ということで、私が「テレパス21」に投稿した「風水体感記」シリーズ（全5回）を公開いたします。

風水体感記（天の巻）

ここ2、3年の間、わが国にも「風水」に関する新しい波が押し寄せてきました。この現象は精神世界の分野でも同様でまさに必要必然のシンクロニシティ（共時性＝意味のある偶然）現象のようです。

私は建築の設計の仕事をしています。仕事を通して家相方位等の必要性から気学を学んでいましたが、そんな過程の中で気学の原点は奇門遁甲にあることを知り、奇門遁甲を学んでいるうちに、さらにその奥に地理風水の分野があることに気づきました。

しかし当時わが国にはその種の専門書がほとんどなく、私は建築の仕事を通して試行錯誤をしながら風水についての資料を集めていました。

ちようどその頃、建築雑誌等に「風水戦争」と題して香港のビクトリア・ハーバーを目前にして建つ香港上海銀行と中国銀行の記事が掲載されました。

前者は英国の建築家ノーマン・フォスターの設計、後者は米国の建築家I・M・ペイの設計による高層建築で土地柄、共に随所に風水の思想が反映され、風水師の意見が取り入れられているということでした。

何分にも1997年の中国返還を目前とした国際都市・香港での出来事です。これらの情報は世界中に報じられ、またたく間に「風水」の存在を世界に知らしめました。

1991年4月、私はこの状況を自分の目で体験するべく仕事の仲間2人で香港に飛び立ちました。

実はこの時よりこれから述べる風水と私との出逢いの旅が始まったのです。

香港上海銀行の建物は最新の技術と無機質な材料を使っているハイテク建築で一見口ケットの発射台のようにも見えます。

風水的に感じられたことは1階をピロティにし、通り抜けの広場を造り、2階に銀行を上げ、ここを通る人々をエスカレーターで一気に2階に招き入れる手法を使っています。

驚いたことに広場の床は波打っており、まるで龍の背を表現しているのです。また、入口には一対のライオン像が配置され、ハイテク建築とのミスマッチが異様でした。

これに対し、中国銀行の建物は三角形を組み合わせたシャープな外観で、斧の形態をした尖塔部が向かい側にある香港上海銀行に刃物を突きつけた形に建っています。

これは風水上、「鬼角」といわれ、突きつけられたほうに悪い龍が向かってくると恐れられています。見方によっては尖塔部分が龍の角にも見えます。

風水師は「龍のいる建物を作れ」と指導しますが、まさに両銀行は龍と龍との戦いのようでした。このほか、仕事柄香港に建つ建物の色々ウォッチングしましたが、あきらかに風水的に考慮されていると思われる建物、易の八卦の形を活用している八角形の建物、外観の色も地元で縁起の良い色といわれている緑色の建物が多く目立ちました。

私にとってこの香港風水旅行は貴重な体験で、設計上、色々学ぶことができました。そんな状況を体験しながら、帰りに市内の書店に寄り、香港の近代建築写真集と風水に関する本を見つけ、記念に購入して帰郷しました。

帰郷してから数カ月間、時々香港で求めた写真集と風水の本を眺めていました。突然、その年の8月に鎌崎倬寿氏の主宰するインターデイメンションより「気と風水」に関するセミナーの案内が届きました。

レジュメを見ると、講師は台湾出身の中国人、林雲大師。師はチベット密教黒帽派（密宗黒教）の継承者で、気のエネルギーと風水について解説することでした。現在は講演活動を主に風水コンサルタントとして全米で活躍中と紹介されていました。そして驚いたことは偶然にも大師は、私が香港で求めた風水書の著者でもありました。まさに共時性現象でした。これも何かの縁と思ひ、私も早速ワクワクしながらこのセミナー「気と風水」に出席し、生まれて初めて風水に関する講義を受けました。

風水には、大きく分けて二種の学派が存在し、一方は地形や龍脈の動きを重視する形勢学派、もう一方は建物や墓地の空間的定位に重きをおく理気学派です。

理気学派の風水師は羅盤（ラバン）を駆使して建物の方位を細かく測定します。これに対し形勢学派では、その場所に入首した地龍の方位を検討します。

林雲大師が伝える密宗黒教における風水は「心易風水」と呼ばれ、羅盤を用いず易の八卦を活用した「玄空八卦」理論で判断します。

師はその人の住む家を見れば、その人の人生が手に取るようにわかるという（進門第一眼所着到的）。

即ち空間内での気の適切な流れを知り、気の流れを調整してその解決を図ります。この方法を師は「出世解」と称し、私たちの目に見える次元の裏に見えざる次元が存在し、そしてそれが目に見える次元を支えているという中国哲学「タオの玄学」に基づいています。

私は易学を学んでいたのでこの理論は十分理解できました。

講義も終わり、私が香港で求めた大師著の風水書を差し出すと、大師は大変喜んで助手に筆を持ってこさせ、私の名前を聞き、その風水書に私の名前を入れサインしてくれました。私にとって感動の一瞬でした。その後、大師著の『風水によるインテリアデザイン』の書物も手に入れることができました。

翌年（1992年）6月、鎌崎氏は北京より風水師乾康老師を招き、再びセミナーを2日間にあわせて開催しました。

乾康老師の蛾眉派の風水は、山脈や丘陵をその看法の中心に据えているために壮大でした。実視法として山の形、水の流れ等の見方を解説してくれました。心地看法として、気

場を感じたり、気色を観たり、地音を聴く法も紹介されました。また、ト占法として、遠隔地を判断する方法が紹介されました。この占法は諸葛孔明も使ったといわれている六壬時課「天性指掌訣」で年月日時吉凶で判断します。

また、納音五行より命を出し、五行の相剋からその人の玄関や枕の位置を決定する占法も解説されました。

風水の地とは気持ちが良い土地のことで、陰陽のバランスがとれている場所をいいます。また、この日フィールドワークとして、JR山手線田町駅前にあるNEC本社ビルそばの薩摩藩屋敷跡の小さな碑の場所と慶応大学構内にある大木の周辺をエネルギースポット（気持ちの良い場所）として紹介されました。私自身、貴重な体験を味わいました。林雲大師の黒帽派風水は、都市生活者向けに室内の家具の配置や建物の周辺に重きを置いているのに対して、乾康老師の蛾眉派の風水は建物を自然の一部としてみます。

林雲大師のミクロ的看法に対して、乾康老師はマクロ的看法でした。

いずれにせよ、鎌崎氏がわが国で初めて仕掛けてくれた2つの風水セミナーに参加できたことは私にとって貴重な体験でした。この2つのセミナーに出席して、「風水」といっても、大原則はあるが風水師の見方によっては色々な看法があることに気づきました。

しかし、私はこれらの異種の風水セミナーに参加したものの何か物足りなさを感じていました。なぜなら風水で使う「三種の神器」の一つである羅盤というなぜか謎めいた風水用具を駆使する風水師に会えなかったからでした。

易者が筮竹（ぜいちく）で易占するように羅盤をあやつる風水師に会いたいと願っていました。私にとってこれもロマンでした。

「念ずれば花ひらく」という言葉がありますが、この想いも1992年9月に実現します。中華民国において地理風水を習得した当時、わが国唯一の風水師、御堂龍児師が出現しました。

師は『地理風水聖なる大地の霊力』（光人社）と題した、わが国では初めての実践風水書を世に出しました。私はこの本を偶然書店で見つけ、手にした時の感動を忘れることができませんでした。

なおこの頃、わが国での風水の動きは始まったばかりで作家の荒俣宏氏率いる香港風水は準備中の潜伏期間。氏は翌年（1993年）より各雑誌にて荒俣風水を發表し続けます。

風水体感記（地の巻）

1994年6月5日の夜、NHKテレビ午後21時よりNHKスペシャル「よみがえる平安京 荒俣宏が探る1200年の謎」と題して作家・荒俣氏解説の「風水」についての放送がありました。

内容は古都平安京と四神相応の地をCGを駆使して、1200年前の都をすばらしい映

像で再現されました。また、香港より風水師劉啓治氏を招き、風水学的に平安京が「四神相応の地」に建造されていることを解明していました。

このテレビ放送後、私に色々な人たちから問い合わせがあり、風水が一般の人たちにも身近なものとして関心が高まってきたように感じました。

しかしこの番組の放送後、舞台裏では、ここであえて詳しく書きませんが放送に対しての著作権について問題が生じ、まさに地下で風水戦争が起きていたことも事実です。

さて前半は作家荒俣風水について書いてみます。実はわが国における風水ブームの火付け役は荒俣氏であったのです。

氏は1985年、『帝都物語』（角川書店）で「龍脈」を題材にした伝奇小説を発表します。この小説は映画にもビデオにもなり、私の頭の中では桂三枝演じるユニークな風水師が浮かんできます。

そして1993年、氏は雑誌『クォーク』3月号（講談社）で、まず本土琉球（沖縄）の自然観として風水思想を取り上げ、実例として47年ぶりに復元された「首里城」を風水の地として検分します。

「風水」とは、地形、景観、環境の中に「気」というエネルギーの流れを読むとうとする考え方で、大地に関する「経絡」や「気功」ともいわれています。

さらに琉球には、母の胎内を思い出させる形をした「亀甲墓」と呼ばれる墓があり、これらは風水思想に基づいて細かく方位や寸法が定められており、その測量を風水看（師）

が任されます。

「風水」とは琉球王国における都市工学であり、今でも沖縄の人々の自然観に影響を与えているという。

その後、氏は1993年6月から1994年2月まで、雑誌『週刊プレイボーイ』（集英社）に、「ニッポン風水漫遊記」と題して、23回にわたって連載しました。

私がこのシリーズを知ったのは第2回で、すでに第1回は絶版。しかし集英社のこのシリーズの担当者である野村氏の配慮で、第1回の雑誌を送っていただきました。感謝！

このシリーズは、荒俣氏が香港より風水師を招き、同伴で日本の都市（奈良、京都、大阪、東京、福岡、博多、名古屋、北海道）の風水スポットを歩いた実践記録で、私は毎週楽しく読ませていただきました。

また、氏は1994年、雑誌『エグゼクティブ』（ダイヤモンド社）の1月号で、香港より呂志山師を招き「東京の風水チェック」を発表します。これは東京の大企業の本社ビルの風水鑑定の報告書でした。

師は「風水」とは気功の治療術と同じで、大地が持つ気を十分に活用して、そこでの商売や事業を大成させようとする方法で、この地上にはどの場所にも、三種類の気（天の気、地の気、磁気）が作用しており、そこに建つ建物とそこに住む人の運勢に大きく作用しているといえます。

このうち磁気は、羅盤と呼ばれる風水師専用のコンパスで測定できるが、天と地の両気

の流れは瞑想して気の方向をみるとのことでした。

その後、NHKの放送メディアを使い、京都遷都1200年を記念して、「よみがえる平安京」を放送。平安京の成り立ちを中国に古代から伝わる地相占術学「風水」の見地から説明しました。

そこで、私は事務所の旅行を兼ねて所員と共にNHKで放送されたコースを体感することになりました。

7月9日の朝、始発で高崎駅を新幹線で出発すると午前10時半には京都駅に到着。偶然にもこの年は平安遷都から1200年を迎えた京都、「京都1200伝統と創生」を統一テーマに各種のイベントが各地で開催されていました。

早速番組で紹介された高さ131メートルの京都タワーまで行き、地上100メートルの展望室から京都市内を一望したあと、望遠鏡で大文字山、船岡山、將軍塚の山々を見下ろしました。

今から1200年前、この地に平安京があったといえます。船岡山の真南に千本通り（昔の朱雀大路）が続いているのも確認しました。

さあこれから京都風水行脚が始まるわけですが、その前に昼食を取ることになりました。まずタクシーで東山区の祇園に行き、ガイドで紹介されていた昼定食20名限定というご飯處・山ふくにて京都のおふくろの味を満喫。食事のあと、まずここから八坂神社まで歩くことにしました。周りの建物が祇園情趣の感があります。思わずカメラのシャッターを

切りました。

八坂神社の前でふと立ち止まると、なんとそこには巨大な石のデパート「ぎおん石」の建物がありました。店員の案内で思わずショールームの中に誘導されます。店内に入って驚きました。日本国内はもとより世界各国の貴石が豊富に取り揃えてありました。私は以前から欲しかった霊性を高めてくれる石として、アズライトのコーナーに行き、何点かの原石を見ましたが、その中にただ一品気に入った原石を発見。手にした瞬間、手にバイブレーションを感じました。

しかしこの石のみプライスはなく、まさに私の手元に入るかのごとく、売れずに私を待っていてくれました。

交渉の結果、店員と店長の好意により譲っていただきました。私の宝物となりました。今回のツアーでのハプニングでした。旅はこの出逢いがあるから楽しいです。

店を出て、まずは今回の風水行脚の安全祈願をしようと京都の「祇園さん」の名で親しまれている八坂神社にお参りします。初めて訪れましたが境内に龍脈の気が強く感じられました。ちなみに八坂神社を羅盤で測ると、192度の癸山丁向でした。

無事安全祈願をしてから、徒歩で平安神宮に向かいます。平安神宮は今から100年前の1895年に、建都1100年を記念して建てられました。平安京は北部に大内裏、正面に朝堂院、中心に大極殿がありました。平安神宮はその平安京の大極殿と応天門を正確に組み合わせ、原寸の8分の5に縮小再現した建造物であるといえます。丹塗りの大鳥居

をくぐると、参道がまっすぐに応天門へと続き、この応天門をくぐると正面に大極殿がそびえ、朱塗りの柱に碧瓦、白砂に青松がすばらしい。この華麗優雅な神域の美しさは、日々参拝される人々にいながらにして、1200年前の平安絵巻を感じさせます。現代とのミスマッチがうまく融合されていました。

この年、1100年祭を記念して、平安神宮の四神旗（玄武、蒼龍、白虎、朱雀）の絵馬とテレカが売られていたので購入。今回のツアーの2つ目のプレゼントでした。

突然私の頭が交錯します。この四神相応の絵馬を使って天海の山王一実神道の呪力の原理を使うと人工的に四神相応の地が出来上がるのでは？

ちなみに平安神宮を羅盤で測ると155度の亥山己向でした。あまりゆっくりもしていかないのです。二条城までタクシーをとばすことにしました。

次のコースはテレビで放送された大文字山から船岡山を通り、龍が水を飲みにやってくる（龍口水）と呼ばれた神泉苑に到着します。

ここは古くから水神としての神龍が住むという。ここは「御池」とも呼ばれ、平安宮に付属して造られた離宮で、宮人の遊園地跡。当時はこの池を中心に広大な庭園であったが二条城の造営等により現在のはかつての6%の広さに過ぎないといえます。

東寺の空海と西寺の守敏との「雨乞い合戦」の伝説は有名です。それにしても池の中島めがけて架けられた朱色の太鼓橋を渡るとそこには空海の善女龍王（188・6度）と弁財天（189・5度）を祀る小祠がありました。

共にお参りしてから、テレビ番組のラストで紹介されていたその年の歳徳神の方向に回転するという恵方社の前に立ちます。

ちなみにこの年（1994年）の恵方は、甲きのえの方向ですが、私が羅盤で測ると256・5度。まさに恵方社は今年の明あきの方、万事吉なる甲あきの方に向いていました。全国でもめずらしい神社を体験しました。

と同時に当時の平安京の栄華の跡地をわずかでも体感することができたことに感謝です。次に徒歩で1200年前の平安京の大極殿跡に向かいました。テレビで放送された羅盤で182度の千本通りを歩きます。さすがに夏の京都は暑い。しかし千本通りの手前の交差点近くになると気のせいなのか、確かに周囲の気がまるで神社の境内に入った感じの気になりました。この感覚は私も所員も同じでした。

作家・荒俣氏によると、南北軸は生氣を集め、使いきった生氣を去らせる流路であり、東西軸はこれを守ったり、散らせたりする役目をするといえます。なんとなく実感します。そしてようやく大極殿にあるミニ公園に到着。テレビではこの場所が風水でいう大地の気が満ちる龍穴だという。ここに1200年前に先ほど訪れた平安神宮の大極殿があったかと思うと感慨無量です。

と同時に歴史をひしひしと感じます。ちなみに羅盤で測ると192度、八坂神社と同じでした。

少し休んでから昔80メートル幅の朱雀大路といわれた千本通りをタクシーでとばし、今

回の最終地、羅城門跡に向かいました。

途中、東寺の前でタクシーを降り、当時朱雀大路の羅城門の入口の東西に建っていた東寺と西寺の跡地を見てからやつのことで現地に到着しました。

そこは大極殿跡と同様、ミニ公園になっており、ひっそりと記念碑のみが寂しそうにポツンと建っていました。

ここでは何か歴史の重さよりも、はかなさと栄枯盛衰を感じました。

と同時に無心になって短時間の中で昔の平安京の左京の跡地をかけめぐってきた疲れがどっと出てきました。

九条通りに出たところ、そこに昔の面影を残している茶店を発見。中に入り休息します。実際この京都風水検分にもう一日ほしかったのですが、今回の社内旅行は京都、大阪、神戸の強行スケジュールのため、これで無事打ち上げ。

夜は大阪に行き、今回の目的の一つ私の好きな建築家・原広司設計の空中都市梅田スカイビルを見学。同時に大阪の夜景と食を味わいました。

翌日は神戸に行き、午後は三宮に行き、異人館めぐりをしましたが当日の神戸は京都より暑かった。

1泊2日、3都の旅の強行メニューもこなし、夕方新幹線に乗り夜22時に高崎に到着。忙中閑あり！ 帰ってきてから、この原稿をまとめながらJTBでいただいた京都の観光図に我々が駆けめぐってきた場所と1200年前に存在していた風水都市・平安京の当時

の位置を重ねて図示しながら、眺めているうちいくつか新発見しました。

東西の各大文字山を結ぶと、線上に龍の頭といわれている船岡山があります。テレビで放送されていた將軍塚ですが、伝えによると、桓武天皇は平安遷都に際し、王城守護の祈りを込めて八尺の武装した土人形を都の方に向けてこの將軍塚に埋めたといえます。

ちなみに国家に災難がある時は必ず將軍塚が震動するとされています。詳しく調べてみると、この將軍塚の「將軍」は、陰陽道という方位を司る方伯神（この神のいる方向を忌む）のことで、北野天満宮の近くにある大將軍八神社も同様に王城鎮護の方除け神とされています。

なにげなくこの將軍塚と大將軍八神社を線で結び、船岡山から南北の線を下ろすと、なんとその交差する地点に、大極殿跡が存在します。これは単なる偶然とはいえないでしょう。思わず絶句！

今回の京都風水検分京都遷都1200年。これほど長期間にわたり都として機能してきた都市は世界にも例がないといえます。

NHKの番組では、この長寿の秘密を解くカギは「風水」にあるといっていました。自然環境の地形（四神相応）の中で、実はその裏側では人為的に「將軍」という辰、戌の方位の方除けの神々に守護されながら都が生き続けてきたのでは？ これは今回の平安遷都の旅の私の仮説です。

さて、ここで小休止。ティータイムです。後半に入る前に私と風水とのかかわりを少し

書いてみます。

前回（天の巻）にも書いたように、私は建築の設計の仕事を通じて我々人間は自然界のリズム（氣 \parallel 波動）の影響を受けてこの地上界に生かされていることを知りました。

そしてその自然界の法則を探究するために気学を学びました。しかし、この気学を追究していくうちにこの日本気学の原点ともいべき中国の奇門遁甲という学問（兵方術）に出会い、奇門遁甲を追究していく中で、縁あってわが国でのこの分野の研究者・内藤文穂師の研究書『奇門遁甲』真義、奥義、密義の3部作シリーズを入手しました。

このシリーズの内容は奇門遁甲という学問が本場中国から中華民国に流れ伝えられ、中華民国から日本に紹介された1960年代前半、縁あってこの学問を学ばれた師が奇門遁甲の秘伝正宗を求めて自ら中華民国に行き、この分野の各流派の先師のもとを歩いた体験記で、今では奇門遁甲を学ぶ人には必読の幻の書です。

私自身、このシリーズの書物から本場中国の術に対する実体を知ることができました。その書物によりますと、中国では秘伝は一子相伝、門外不出とされ、誓約書を提出し、弟子の礼を取り、師に対して逆らうこともできません。

秘伝は秘伝を受けるだけの人に授かるもので、研究心を忘れ、謙虚さを失い、術の心を離れて秘伝は得られません。

また、中国では師が生涯にただ一人のみに教え、師が没したあとに、また一人のみ教え、このために術は消えたものが多いといわれています。

そんな遁甲探究の中で、常に風水、造作法というキーワードが研究シリーズの中に見え隠れしていました。

しかしその実体となると、なかなか事實は語られていませんでした。今となって考えてみるとそれもそのはず、昔からこれらの風水、造作法は術の白眉として本場中国では口訣の世界のため一般には公開されなかったのは当然のことといえます。

しかし、内藤師が残してくれた「奇門遁甲」3部作シリーズが、我々に中国の「術」に対する心」を教えてくれたことに感謝しています。そんな出会いの中で、私の頭の中では「秘伝、一子相伝、誓約書、弟子の礼、風水、造作法」という図式ができていたことも事実です。

しかしその後、造作法については一部の限られた人に公開されましたが、風水についてはまた閉ざされた世界でした。私は当時からこの風水、造作法について興味を持ちコツコツ資料を集めていました。

「造作法」というキーワードは皆さんも初めて聞いたとは思いますが、簡単にいいますとこれは奇門遁甲の極秘伝として方位と日時を合わせて穴掘り、杭打ち、玉埋めをする秘法で、荒俣氏の説く、天海が江戸城内に約15センチの黄金の玉を埋め、江戸城に龍脈エネルギーの集中装置をセットしたという伝承も、まさにこれにあたります。

実は「地理風水」も昔から天皇家のみに伝わっていた極秘伝でして天台宗をおこした伝教大師・最澄は、中国に渡って風水を知り、帰国して書を黒い箱に納めて桓武天皇に奉り

代々天皇から天皇へと伝えられ、後水尾天皇から徳川幕府の参謀、慈眼大師天海に賜り、以後この風水を封じたと伝えられています。

これらの流れをみますと、まさに桓武天皇の築かれた平安京、徳川家の日光東照宮の家康の墓、そして現在皇居になっている江戸城には風水が使われていたのは事実といえます。

また同時代の弘法大師・空海も当然「風水」を学んでいて、空海の説く真言密教の修行の地として選定した高野山は、四囲の山々が蓮の花びらにあたり、その花芯が金剛峯寺で、空海の廟所が龍穴といわれています（内藤文穂著『奇門遁甲行動術』）。

これらの文献を手にした頃、私は東京赤坂にある内藤先生の事務所を訪れ、私の事務所の家相鑑定をお願いしました。この時、内藤先生の一言が当時私の迷っていたことを一瞬に解決しました。その後の私の生き方も変えることになりました。その後、内藤事務所と私の事務所と顧問契約をし、2年間内藤先生の指導を受けました。今や懐かしい限りです。毎月会員に発行される「赤坂だより」の内容はすごかった。今や幻の文献になっています。実は最近ブームになってきた「風水」もこのような長い歴史の中でベールに包まれ、水面下で生き続けてきたのです。

まずこれらの事実を認識してから「風水」をとらえてみてください。

1992年、この年は私の生涯の中でも劇的な年でした。今までの自分の生き方、考え方も変えさせた精神世界との出会いがありました。そんな世界の中で、私自身、待ちに待った「風水」との出会いもあったわけで、これも意味あることといえます。と同時に今

まで封じられていた風水が、世の中の変化に伴い解禁になったわけです。

御堂龍児師も当時内藤師が遁甲の秘伝正宗を求めて中華民国に渡ったと同様に1985年、風水の秘伝正宗を求めて中華民国に渡り、縁あって多くの先師に出会い、各派の風水を学ばれました。

やはり限られた人のみが、術の本場で奥伝を得られるようです。御堂師の行動も必然の使命だったのかもしれない。

風水体感記（人の巻）

私自身、最近感じるのですが、地球の地表から発している南北と東西方向の地磁気のエネルギー線が人体の各細胞にある磁気と連動し、環境と人体の相互作用により、人体は大地と自然から波動の形でエネルギーを受け取るようになってきているようです。

ですから一般に「気場」または「パワースポット」といわれている場所では地磁気の磁束密度が高いため人は心が落ち着き、爽快感を覚えます。

そうした場所では、当然植物の生育も良くて相乗効果で快適な場所になるようです。この地で気功でもしたら最高でしょう。まさに地の気を強く感じることができます。

地理風水にも「三元派」や「三合派」があるように、「大地理」と「小地理」という見方があります。前者は国家レベルであり、国の遷都や天皇の墓所が対象であり、後者は個

人レベルであり、方位や家相を重んじます。

それでは、我々が「小地理」としての風水を生かすにはどうしたら良いのでしょうか？

私は建築設計の仕事をしています。方位と家相、そして建物を建てる時期と入居時期も大変重要になってきます（これを風水では「択日」といい、重要視します）。

日本の家相では、宅心（太極）と八方位の象意を平面の張り、欠けで判断しますが、風水家相では、建物の座山ざざんを重要視し、二十四山の象意と気の流れにより吉凶を判断します。玄関の向きが大事です。

実際は羅盤を使って鑑定し、風水的にみて良くない場所は、玄関や門の位置や向きを変え、風水アイテム（門公尺、八卦鏡、水槽等）を使って改善します。ここが風水の妙味といえます。

私自身最近仕事を通してひしひしと感じることは、「自然であれ！」ということ。別の見方をするに「原点に戻れ！」の天の声が聞こえます。

そこでもう一度計画原論に戻って「住まいとは何か？」を考えますと、そこに一つの仮説が出来上がりました。

それは「祐気快適空間」です。地域特性のエネルギーを取り入れるべきです。そしてキーワードは、「光、熱、音、水、空気」です。まさにこれらの言葉は建築に携わる人に与えられた課題でもあります。

この「祐気快適空間」は私の提案する造語ですが、簡単にいえばその空間とはそこに住

途中省略

続きは製品版にてお読みください。

著者プロフィール

今井 雅晴 (いまい まさはる)

群馬県高崎市在住。占術・風水研究家。一級建築士。

株式会社イマイ建築設計事務所 代表取締役。

大学建築学科を卒業後、建築設計事務所に入所。10年間各種設計、監理を担当する。

1984年1月、建築設計事務所を設立。現在まで約600件の各種建築を設計・監理する。

設計の仕事を通して、方位、家相の重要さを痛感し、気学、易学、奇門遁甲、風水の理論を学び、実践する。住宅情報誌『マイホーム』、ラジオ高崎、FM OZEにて、風水をテーマにしたレギュラーコーナーを担当する。風水実践会「i & i ライフビジネス研究会」を主宰（現在休会中）。風水に関する記事が多数。

著書に『風水開運家づくり21』（広報社）がある。

●2004年浜名湖花博「風水の庭」で風水原理に基づいた庭全体の監修を担当。「幸福を呼び込む現代的な庭」を提案。華道家の假屋崎省吾氏と競演する。

2014年12月、この書の発刊を記念して、下記から同じタイトルの新HPを発信、続編を公開中です。

<http://www.imaimasaharu.com>

カバーデザイン／今井清貴

風水からのメッセージ

人生・ビジネス・家づくり 想えば実現する

2015年1月15日 電子版発行

著者 今井 雅晴

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Masaharu Imai 2015 Coded in Japan

ISBN978-4-286-15719-1

- 本作品の全部または一部を複製、編集、修正、変更、頒布、貸与、公衆送信、翻案、配布する等の著作権及び著作者人格権侵害となる行為、および有償・無償に関わらず、本データを第三者に譲渡することは禁止いたします。